

〈特集〉

本特集について

石井雅章*

Introduction

ISHII Masaaki

本特集は「コロナ禍におけるオンライン授業と学習支援」というテーマで、コロナ禍における神田外語大学(以下、本学)でのオンライン授業及び学習支援がどのように実施・運営されたのかについて、9本の論考によってまとめたものである。

本特集の目的は、①本学でのオンライン授業及び学習支援の実践を記録として残すこと、②本学でのオンライン授業及び学習支援の実施・運営の背景と関係者による工夫を今後に向けた知見としてまとめること、③コロナ禍におけるオンライン授業及び学習支援を通じて得た知見を今後の大学の方向性を考えるためのヒントになるようなかたちで示すこと、である。

①の目的は「本学がなにをおこなったのか」という記録を残すことである。オンライン授業にかぎらず、当初は新奇性の高い取り組みでも、日々の実践を通じて慣習化されることで、次第に意識されることがなくなり、結果として実践が記録されず、後から振り返ることが困難になることがあるため、まずは実践の記録を事実として記述しておくことが重要であると考えたからだ。

②の目的は「本学はどのように対応したのか」という知見をまとめることである。パンデミックのような社会や生活全般に影響を及ぼす事態に、大学という組織及びそこに関わる個人がそれぞれどのように向き合い、教

* 神田外語大学 グローバル・リベラルアーツ学部グローバル・リベラルアーツ
学科 教授/教育イノベーション研究センター長

育をはじめとする高等教育機関としての機能をいかにして維持・向上させようとしたのかをまとめておくことは、不確実性の高い現代社会において有意義であると考えた。

③の目的は「大学はなにを目指すのか」という視座を示すことである。コロナ禍において、現状の大学がどのような特徴を有し、どのような脆弱性を持つ機関・制度であるのかが浮き彫りになったと言える。新型コロナウイルスという事象によって照射された大学の特質を整理することで、今後の大学のあり方を考える上でのヒントとなりうると考えた。

以上の目的をふまえて、下記4つの観点から本特集を構成した。

- A) 教職員と学生(教職学)の協働による実践であったことをふまえて、職員の立場からまとめた論考を組み込む(論考 2,3)
- B) オンライン授業の多様な実践を網羅するためリアルタイム型・オンデマンド型・ハイブリッド型それぞれの実践に関する論考を組み込む(論考 4,5,6,7)
- C) 授業だけではなく、本学の特徴のひとつである学習支援におけるオンライン実践に関する論考を組み込む(論考 8,9)
- D) 本学だけではなく世界及び日本の動向を理解するための論考を組み込む(論考 1,9)

論考1「コロナ禍における高等教育へのインパクト」(石井)では、COVID-19のパンデミックにおいて高等教育がどのような影響を受けたのかについて、欧州や米国等で実施された各種調査での量的データを元に、日本における調査結果を交えながら多面的に整理し、今後の大学のあり方を考える上での視座を示した。

論考2「神田外語大学におけるオンライン授業実践—Innovation KUISの取り組み—」(吉野)では、本学におけるコロナ禍におけるオンライン授業の実践として、教職員と学生が共に取り組んだ「Innovation KUIS」プロジェクトを紹介し、2020年度前期授業の開講を実現した支援体制とその後の展開について論じている。

論考3「オンライン授業アンケートの実施と、その結果から見る本学の

オンライン授業について」(高瀬・外間)では、上述の「Innovation KUIS」プロジェクトの一環として2020年度に実施された本学での「オンライン授業アンケート」(教員向け・学生向け各6回、計12回)の概要について説明し、その結果から明らかになった本学のオンライン授業実践の傾向について論じている。

論考4「Transitioning to Emergency Remote Teaching in the ELI during the COVID-19 Pandemic」(Lege, Bonner & Roloff-Rothman)では、本学の英語教員組織である English Language Institute (ELI)におけるコミュニケーションを重視したオンライン授業の実践と支援について取り上げ、組織横断的なチーム体制により実施された様々な支援策について論じている。

論考5「反転授業とLMSを活用したオンライン文法授業の試み」と論考6「オムニバス講義のオンデマンド型オンライン授業について」(いずれも松井)では、本学におけるリアルタイム型及びオンデマンド型オンライン授業実践が紹介される。前者では反転授業を取り入れたオンライン授業の実践について、授業設計の考え方から本学が提供する学習管理システム(LMS)の一つである moodle の具体的な活用に至るまで具体的に論じられ、後者では複数教員の講義で構成されるオムニバス形式の科目特性に考慮したオンデマンド型のオンライン授業について、Google Classroom の具体的な活用方法を交えて論じられている。いずれの論考も学生による授業アンケートの結果をコロナ禍前の対面授業時の結果と比較している。

論考7「コロナ禍におけるハイブリッド授業担当大学講師のオートエスノグラフィー」(田島)では、リアルタイム型とオンデマンド型を組み合わせたハイブリッド型のオンライン授業の実践をオートエスノグラフィーの手法を用いて記述することで、大学全体の授業アンケートの結果からは見えてこないオンライン授業における教員と学生の迷いと葛藤を、固有性を持つ大学教員の声として論じている。

論考8「ASCにおけるオンライン学習支援」(西・小館・竹内・大森)では、本学のアカデミックサクセスセンター(ASC)が実施してきた学習支援の中から、ピアチューター制度、日本語ライティングセンター及び個別英語学習支援(Q Desk)を取り上げ、コロナ禍におけるオンライン化の成果

と課題について論じている。

論考9「コロナ禍の高等教育におけるオンライン学習支援」(岩崎)では、関西大学での全学的な学習支援の取り組みを事例として、本学以外の大学でオンライン学習支援がどのように実施されていたのかを示すとともに、オンラインでの学習支援における配慮について論じている。

本特集にあたり、関西大学の岩崎千晶先生をはじめ、日々の授業や学務等でご多忙な教職員の方々に無理を承知で執筆を依頼したにもかかわらず、本特集の趣旨をご理解及びご快諾いただいたことに心より感謝のかぎりである。本来であれば、ご寄稿いただいた論考を一緒に読み合わせ、執筆者の間で議論を深めてさらなる考察へと展開していくべきところ、そのような機会を設けることができなかったことは、ひとえに特集担当者の力不足によるものであり、執筆者及び読者にお詫び申し上げたい。

最後に、本特集は本学でのオンライン授業及び学習支援の実践を中心にまとめたものであるが、特集の目的にも示したように単なる「実践事例集」ではない。各論考は、高等教育機関としての大学が元来抱えていた困難や矛盾がコロナ禍によって再照射され、それらの困難や矛盾にどのように向き合い、可能な範囲の工夫を積み重ねてきたのかについての記述と考察である。本特集で示された課題と可能性が今後の大学のあり方を考える際に参照され、具現化にあたっての参考となることを期待して、本特集を読者に引き継ぎたい。